

2010年度 日本比較文化学会 九州・中四国・関西3支部

合同研究会プログラム

日時：2010年12月11日（土）13：00～17：00（受付開始12：30）

場所：同志社大学（今出川キャンパス）

神学館 地下1番教室、2番教室

http://www.doshisha.ac.jp/access/ima_campus.html

研究発表（13：00～16：00）

● 研究発表第1室（神学館地下1番教室）

司会：崎村弘文（久留米大学）

- ① 呼称からみるアイデンティティの変化
—*How the Garcia Girls Lost Their Accents* のヨランダの場合—
塚本美穂（福岡女子大学大学院）
- ② 生涯学習講師集団の学習組織としての力量形成（2）
—北九州生涯学習講師の会（白芦会）を事例として—
樋口真己（西南女学院大学）

司会：丸橋良雄（京都大学）

- ③ 眼からの感覚—「暗い夏」と《アンダルシアの犬》—
瀬本阿矢（京都大学非常勤講師）
- ④ イングロ・カズオの小説「浮世の画家」の呼称についての考察
林 裕二（西南女学院大学）
- ⑤ 日仏比較文化論—旧高取邸貯蔵庫調査に関する一考察—
前田昌子（La Confrérie des Chevaliers du Tastevin）

● 研究発表第2室（神学館地下2番教室）

司会：長谷部陽一郎（同志社大学）

- ① 新島襄のキリスト教信仰の原点
阿部正敏（岡山大学）

② 石の饗応：復讐劇としての *Timon of Athens* と *The Witches of Lancashire*
中村友紀（関東学院大学）

③ CALL 教育の上にも 3 年
一言語教育における CALL 学習に対する学生と教員の実態および意識調査から—
岩田聖子（追手門学院大学）
中条貴夫（追手門学院大学）

司会：金志佳代子（兵庫県立大学）

④ 大学における CALL 教室とその運用の動向について
八尋春海（西南女学院大学）

⑤ 日本の中国観—最近在日本出版中国関連書籍考察—（04.9-10.8）
藤田昌志（三重大学）

講演（16：10～17：00） 神学館地下1番教室

司会 山内信幸（同志社大学）
講師 中川久公先生（京都ゑびす神社宮司）
「今どきの京都」

関西支部総会（17：00～17：10）神学館地下1番教室

懇親会（17：30～19：30）

じろく亭（木屋町三条下ル、黄桜木屋町ビル4階） ☎075-213-2333

会費 4000 円ていど

http://www.kizakura.co.jp/ja/j_top.cgi?id=1

● 研究発表第1室（神学館地下1番教室）①

呼称からみるアイデンティティの変化
— *How the Garcia Girls Lost Their Accents* のヨランダの場合

塚本美穂（福岡女子大学大学院）

近年、米国では移民者数が増加の一途をたどっている。米国への移民者数は、米国国勢調査局によれば、2000年には1611万人、2004年1874万人、2010年2174万人と急増し続けていることがわかる。そのうち、ヒスパニックの移民者数は最大であり、メキシコ、キューバ、エルサルバドル、ドミニカ共和国の順で移民者数が多いとの調査結果が出ている。

米国での移民の生活を描いた作品も少しずつ表れている。フリヤ・アルバレス(1950-)は米国生まれのドミニカ系アメリカ人作家であり、生後間もなく、両親の母国であるドミニカ共和国に渡るが、父親が当時の独裁者ラファエル・トルヒーヨの反体制政治活動に参加したことが発覚し、命を狙われ、米国へ逃亡している。

How the Garcia Girls Lost Their Accents (1991)は、アルバレスの半生に基づいた半自叙伝的な作品であり、ガルシア一家の30年間にわたる米国生活と一家の文化的適応について描かれている。作品に登場するヨランダは、アルバレスの半分身的な存在であり、渡米後英語に興味を持ち、物書きになるという設定である。しかしながら、ヨランダは長年の米国生活によって母語のスペイン語を忘れ、言語的に適応できなくなる様が描かれている。

本発表では、彼女の名前「ヨランダ」の愛称が、米国とドミニカ共和国では異なり、「ヨ」、「ヨヨ」、「ジョー」と書き分けられている点に注目し、彼女の呼称からみられるアイデンティティの変化について論じる。

問題となる点は、ヨランダという名前は、米国で売られている名前入りキーホルダーの中には存在しないこと、つまりヨランダという名前が米国では認識されていない様子を、名前の不在イコール自己存在の不在と考察できる点である。また、「ヨ」は英語読みでは「ジョー」と呼ばれ、ヨランダが「ジョー」という名前に拒絶反応を示す点、このため夫ジョンはヨランダを「ヴァイオレット」と呼ぶが、ヨランダには伝わらず、次第に意志疎通が図られなく様を提示する。これは、両者が同じ言語コードを用いていないため、意思疎通が不可能となったと考えられる。そして、ヨランダが米国において言語的に適応できず、他者との関わりの中において自我が確立することができない様子が提示される。アルバレスはヨランダの言語障害を描くことによって、移住国での言語的適応の困難さを強調しているといえる。

本発表では、Yolandaの名前から見るアイデンティティの変化に焦点を当て、言語の相違から生じる言語的適応の困難さを考察する。

● 研究発表第1室（神学館地下1番教室）②

生涯学習講師集団の学習組織としての力量形成（2）
— 北九州生涯学習講師の会（白芦会）を事例として —

樋口真己（西南女学院大学）

前回（第22回九州支部大会にて発表）に引き続き、北九州市の八幡東・西区を中心に公

民館（現北九州市民センター）の講座やクラブ・サークル活動を担当している講師たちが自己研鑽を目的に結成した学習組織を事例として取り上げる。この講師集団「北九州生涯学習講師の会（白芦会）」は、伝統芸能（日本舞踊、茶道、華道等）の師匠たちから手芸や洋裁、和裁、染色、編み物といった生活技術、俳句、書道、写真、武道といったありとあらゆる趣味の分野の講師たちで構成されている組織で、公民館講師を対象に開講された社会教育講座を受講した人たちによって昭和49年に結成され、現在も学習活動を続けている。

今回は、年2回発行している機関紙・関係資料及び現役役員へのインタビューをデータとして使用する。設立初期からの活動については機関紙が学習や実践についての貴重な記録となっている。

本発表では、35年間の活動のなかで、生涯学習支援組織へと展開していった過程を考察する。更に、生涯学習支援活動の意義や課題について論じる予定である。

● 研究発表第1室（神学館地下1番教室）③

眼からの感覚―「暗い夏」と《アンダルシアの犬》―

瀬本阿矢（京都大学非常勤講師）

本発表では、女性の代表としてシュルレアリスムの表現を利用して執筆したと考えられる左川ちか（1911 - 1936）に焦点を当てる。特にこの詩人がどのようにフランスのシュルレアリスムに影響を受け、独自の世界を作り上げたかについて考察する。

左川は25歳という若さで他界したため、その創作期間はわずか6年足らずであった。しかしながら、左川の詩は周囲の芸術家もみとめるほどの才能を持っており、他の日本女性の芸術家に比べ、比較的研究資料も残されているため、左川の詩の研究は、現在徐々に盛んになりつつある。左川の詩について、西脇順三郎は、「非常に女性でありながら知的に透明な気品ある思考があの方の詩をよく生命づけたものである」と述べている。左川は、眼で見ることのできる絵画から詩作のインスピレーションを受けていた。しかしながら、それと同時に、見ることによる映像の重視の中に、映画も含まれていたと考えられる。なぜならば、左川が映画からも影響を受けていたのではないかと考えられる作品が残されているからである。それは、1933年7月、アキラ書房発行の『作家』第一号に発表された「暗い夏」と題された散文詩である。この中で、《アンダルシアの犬》（1928）を連想せずにはいられない箇所が数ヶ所ある。《アンダルシアの犬》とは、サルヴァドール・ダリ Salvador Dalí（1904 - 1989）が始めてルイス・ブニェル Luis Buñuel（1900 - 1983）と共同で制作したサイレント映画である。

そこで、本発表では、左川作品とダリの映画との間にどのような影響関係があるのかについて詳しく探求する。左川は、シュルレアリスムに最も近い数少ない女性芸術家と目されている人物であることから、日本女性とシュルレアリスム活動との関わりの具体例を明らかにした左川に関する本発表は、今後の日本のシュルレアリスム研究において重要になると考える。

● 研究発表第1室（神学館地下1番教室）④

イングロ・カズオの小説「浮世の画家」の呼称についての考察

イシグロ・カズオは五歳まで長崎で育ち、その後に家族でイギリスに渡り、教育を受けた人物であり、日系イギリス人作家とされる。

1982年の*A Pale View of Hills* (翻訳 1984: 女たちの遠い夏、2001: 遠い山なみの光) には、主に日本人が登場し、日本とイギリスが舞台として描かれている。続いて、1986年の*An Artist of the Floating World*, (翻訳 1988: 浮世の画家)では、日本を舞台とする日本人たちの物語が描かれる。語り手、登場人物が全て日本人である物語が、英語で書かれている。物語は、1948年から1950年の間の長崎で、戦前・戦中に地域の有力者であった画家オノ・マズジをめぐる人間関係を描いている。

日本社会とイギリス社会、あるいは英語圏の社会において、対人関係を示す呼称については、大きく異なる面がある。それは、話し手が、話し手自身、聞き手、第三者をどのように呼ぶかであり、語り手が、誰をどう呼ぶかにかかわるものである。

呼称については、日本語の場合には、鈴木孝夫(1973)が、上下関係が規定していると唱えている。*An Artist of the Floating World*が日本社会を描いていることを前提として読むと、鈴木の見点からは奇妙とも思える部分が出てくる。その奇妙さを、原作と翻訳を比較しながら考察していく。

● 研究発表第1室 (神学館地下1番教室) ⑤

日仏比較文化論—旧高取邸貯蔵庫調査に関する一考察—

前田昌子 (La Confrérie des Chevaliers du Tastevin)

九州の佐賀県(当時の佐賀藩)には、かつて幕末から明治にかけ、「石炭王」と呼ばれるまでに活躍した実業家、高取伊好氏(1850年—1927年)という人物がいた。

儒学で名高い多久藩で儒者の子として生まれた彼は、東原彦舎や佐賀藩校弘道館などで漢学と国学を学んでいたが、その後上京し、これまでの進路を一転、英学塾「三叉塾」から「慶應義塾」(現在の慶応大学)にすすみ英学を修める。それによって後に入学することになった官費学校の「鉾山寮」で、卓越した採炭技術を、誰よりも早く習得するのである。

学生時代には東郷平八郎や伊地知弘一と、独立し起業してからは大隈重信や後藤象二郎、岩崎弥太郎等と交友があり、他にも多くの歴史上の重要人物が、彼のもとを訪れた記録が残っている。

2500坪に及ぶ彼の邸宅は、現在も佐賀県唐津市の唐津城そばに国の重要文化財として保存され、一般公開されている。

専門家も驚愕する華麗な能舞台を備えたこの邸宅の貯蔵庫から、2007年におよそ100年前のワインが大量に発見された。文化財であれば陶片ひとつ見逃さず保存する日本の役所ははたしてどう対応したのか。欧州ならどうだっただろうか。捨て置かれたワインのラベルが物語るのは?本発表では実際のラベルを見て、物言わぬ過去をワインの故国と比較検証しながら、読み解いてみたい。

● 研究発表第2室 (神学館地下2番教室) ①

新島襄のキリスト教信仰の原点

今もその事情に変わらないだろうが、キリスト教に対する理解もなければ、さらにあえてキリスト教のことを知ろうとすらしめない日本人の多くを相手にしては、とてもキリスト教のことを語ることはできない。今日のグローバルな世界状況にありながら、欧米に関する研究や教育でも、そしてまたジャーナリズムが提出する情報でも、キリスト教に対する無知無理解ははなはだしい。それを想えば、近代化に乗り出した明治時代前期、アメリカより派遣の宣教師であった新島襄は、キリスト教に対する理解を得ることができないもどかしさを、絶えず実感していたことだろう。それだけに、そんな新島が心から、深く共感し合えるのは、敬虔なアメリカの友人たちであった。だからこそ、彼らアメリカの友人たちに対しては、日本をキリスト教化することが自分の使命であり、そのために同志社をキリスト教の牙城として多くのクリスチャンを養成することに献身すると、新島は彼のイングリッシュ・レターのなかで力強く語った。

そのような新島襄の精神と信仰を知るうえで無視できない文献資料が、彼がアメリカ到着以後死のまぎわまで書き続けたイングリッシュ・レターである。新島は、アメリカの敬虔なクリスチャンであった友人たちに、つねに自分の信仰を語って、その真摯な信仰ぶりで感動させていた。新島が25年余りにわたって書き続けたイングリッシュ・レターは、その一貫した強い信仰が今も印象深い。いかにアメリカの友人たちを新島が魅了したのかが、髣髴として目の当たりに見る思いがする。

では、そのような信仰を、新島はいかにして形成したのだろうか。パウロの場合からも明らかなように、強い信仰は、衝撃的ともいえるその人特有の信仰の出発点があるようだ。新島の、*How I became a Christian* とは、どのようなものであったのか。

この発表は、その問題を私が考察して判明したことを表明するものである。

このことに触れて、新島のイングリッシュ・レターに加えてさらに重要なことがある。それは、新島がイングリッシュ・バイブル、それも1611年翻訳の欽定訳聖書を熱心に読んでいたことだ。聖書を読むとはいっても、イングリッシュ・バイブルを読むのと、日本語訳聖書を読むのでは、事情もはなはだ違えば、結果として形成される信仰もすこぶ異なる。宗教改革においても、西洋近代文明の形成においても、またアメリカ・プロテスタンティズムにおいても、欽定訳聖書が与えた影響は著しく強大であった。新島襄の場合も、この欽定訳聖書をアメリカ到着前から読み始めていたのであり、そのなかでゴッド神に出会った。その決定的影響を知らしめるものが、彼がアメリカ到着後すぐに書いた英文から、読み取ることができると私は考える。とりわけ、『詩篇』が新島の神理解と祈りの信仰を決定づけたと私は論証してみたい。

このことを論じて、私は新島襄のキリスト教信仰の原点を明らかにするであろう。

● 研究発表第2室（神学館地下2番教室）②

石の饗応：復讐劇としての *Timon of Athens* と *The Witches of Lancashire*

中村友紀（関東学院大学）

本発表では、シェイクスピアによる *Timon of Athens*（以下『タイモン』と略）と、トマス・ヘイウッドとリチャード・ブルームによる *The Witches of Lancashire*（以下『ランカシャー』）とを取り上げる。両作品に共通する復讐場面に注目し、そこに表現される社会的

関係性の近代初期的特徴を分析し、その演劇表象の美学的・コミュニケーション的意義を検証する。

復讐とは、自然法的なレベルでの権利の概念、個人間の社会的関係性、および個人と社会との関係性等の、諸要素のダイナミクスの産物ともいえる行為である。他者に制裁を加えるという行為には、損なわれた自己の権利回復という目的があり、また、正義の権威の自認という意義もあり、自己や社会に関する意識が顕著な現れ方をする行為である。その観点から見ると、近代初期に頻発した民衆層の暴動や、あるいはシャリヴァリの懲罰儀礼と同様のメンタリティーが、復讐という行動様式には認められる。

『タイモン』と『ランカシャー』とは共通して、饗応で欺いて意趣返しする場面がある。相互扶助や互酬という共同体的関係性に裏切られて被害意識を持つ者が、宴席で他者に一杯食わせて復讐を果たすという場面である。どちらの作品もジャンルとしては復讐劇ではないが、石の饗応の復讐場面は、両作品の中でいわば山場である。なぜ復讐行為が見せ場としての効果を持ちうるのか。それを考える上で鍵となるのが、復讐劇というジャンルが、16世紀後半から17世紀にかけて人気を誇り、Thomas Kydの*The Spanish Tragedy*やThomas Middletonの*The Revenger's Tragedy*などが、イギリス・ルネサンス期全体にわたり多数上演されたという事実である。復讐という対他者・対社会の葛藤の表現を見る受容経験が、近代初期の個人の心性にどのような効果をもたらしたのか。本研究では、それを観客の内なる近代的自我形成への演劇の関与の問題として考察する。

こうした問題点については、例えば Katherine Eisaman Maus (*Inwardness of Theatre in the English Renaissance*, 1995) などの、self-awareness (自己認識) への演劇の関与についての先行研究がある。舞台上のモデルを参照して自己成型を行うことを観客に可能にするという点で、近代初期イングランド演劇は中世の宗教劇とは大きく異なり、それが近代的自意識の出現の一つの要因となったという指摘がなされてきた。本発表ではそこにさらに、劇場という場の、一種のパブリック圏的機能の関与を見出したい。プライベートな存在が集まってパブリックを形成するという意味では、劇場はパブリック圏である。観客が舞台上の仮想的事実を集体的に目撃するという意味で、劇場という場は個人を社会的な存在にするといえる。『タイモン』や『ランカシャー』のような、近代化による変化に取り残される者のルサンチマンを観客の集団的意識に刻印する劇は、劇場に出現するパブリックを通じて、17世紀半ばの革命・内戦期 (English Civil War) へと至る社会に影響を与えていたと考えられる。

● 研究発表第2室 (神学館地下2番教室) ③

CALL 教育の上にも3年

一言語教育における CALL 学習に対する学生と教員の実態および意識調査から

岩田聖子 (追手門学院大学)

中条貴夫 (追手門学院大学)

キーワード: CALL 学習 CALL機能の教育支援及び促進 CALL受講者の興味度及び 学習効果に対する信頼度 PC (コンピュータ) 利用頻度と CALL 学習の関係

1. はじめに

1960年代から始まった CALL 利用による語学教育が、日本においても1990年代以降、飛躍的に広く浸透してきた。現在では、その教育機器の有能性がさまざまな実践報告を通

して実証されている。しかし、まだ、ソフトの開発、人材開発、教授法、また PC リテラシー等、乗り越えなければならない問題が多々ある。そのような状況の中で、今回の研究では、CALL 教室利用者へのアンケートを行い、その結果をもとに言語教育における CALL の利点、改善点、さらに今後の展望を述べることにする。

2. CALL 機能の教育支援及び促進の為の CALL 利用者へのアンケート及び分析

CALL 受講者への CALL に対する興味度、信頼度へのアンケート及びその分析

3年前に言語教育の場に CALL システムを導入して以来、継続してきた利用者（ここでは教員）サポートを今期より終了している。理由の一つには、利用者（教員）に CALL の機能及び基本的な操作方法が浸透した、との判断によるが、はたして、実際のところ、利用者（教員）は CALL 機能を十二分に使いこなしているのだろうか。また、CALL 受講者に対しても、CALL 授業がどのように浸透し、つまりどのように受けとめてきたのであろうか。

そこで本研究では、言語学習における CALL 機能の利用者支援と CALL 教室の本来の特性を授業に還元することを目的に、利用者を対象にアンケートを実施し、その実態調査を行った。この結果、利用者（教員）は、CALL 教室で CALL 機能を利用しているよりも、視聴覚教室として利用している事が多い、とわかり、また、現在利用していないが、今後利用したいと思っている CALL 機能が明らかになり、今後の教育支援、促進の指標となった。さらに、受講者の CALL 授業に対する情意面（興味、学習効果に対する心理面）についてのアンケートを行い、CALL 授業の有用性を調査し、同時に PC 歴と PC 利用頻度のアンケートを行ったので、その分析結果も述べていきたい。

● 研究発表第 2 室（神学館地下 2 番教室）④

大学における CALL 教室とその運用の動向について

八尋春海（西南女学院大学）

大学における英語教育の一環として CALL 教室を活用する大学は多い。最近の CALL 教室設備の傾向としては、学生の興味・関心や習熟度に応じた学習ができるような機器やソフトの充実ということが挙げられ、これまで主流だった、CALL 教室を使ってクラス全員で一斉に同じ英語活動をするという授業は、あまり見られなくなった。

CALL 教室、ひいては英語教育活動の充実は、少子化で学生確保の困難さに直面している大学にとって、大学受験を控えている高校生に直接視覚的にアピールできる重要な要素であり、そのような大学の学生募集という点からも、優先的に取り組むべき課題と言える。

本研究では、特にどのような環境下で CALL 教室での個別学習が効果的になされているのか、設備やその運営方法に関して訪問調査を行った。調査対象は、関東地区の大学（お茶の水女子大学、電気通信大学、日本大学、慶応義塾大学、専修大学、明治大学、神田外国語大学、青山学院大学）及び関西地区の大学（同志社大学、京都女子大学、京都外国語大学、近畿大学、大阪大学、甲南女子大学）であり、調査機関は、2010 年の 8 月と 9 月である。

調査に際して、ご協力いただいた各大学の教職員の皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。

● 研究発表第2室（神学館地下2番教室）⑤

日本の中国観—最近在日本出版中国関連書籍考察—（04.9-10.8）

藤田昌志（三重大学）

[内容] この六年間に日本で出版された中国関連書籍の中から重要と思われるものについて考察、発表する。[目的] そのことを通して、日本のさまざまな中国観を浮き彫りにする。取り上げる書籍、発表のキーワードは以下のものである。

1. 日本の中国観Ⅰ—最近在日本出版中国関連書籍考察—（04.9-05.8）

05.4-5 中国反日デモ。小森義久^{こもりよしひさ}（2003）『日中再考』扶桑社文庫、莫邦富（2005）『日中はなぜわかり合えないのか』平凡社新書等。キーワード: 中国批判一辺倒書籍、東アジア経済共同体、アジア連合の実現

2. 日本の中国観Ⅱ—最近在日本出版中国関連書籍考察—（05.9-06.8）

岸田秀・三浦雅士（2005.9）『靖国問題の精神分析』新書館、孔健（2006.1）『中国との戦争は避けられない』幻冬社等。キーワード: 靖国問題、「憤青」（fenqing フェンチン）

3. 日本の中国観Ⅲ—最近在日本出版中国関連書籍考察—（06.9-07.8）

2006.8.15 小泉元首相靖国神社参拝。田島英一（2007.1）『弄ばれるナショナリズム—日中が見ている幻影』朝日新聞社 朝日新書 027、齋藤希史（まれし）『漢文脈と近代日本 もう一つのことばの世界』日本放送出版協会 NHK ブックス [1077] 等。キーワード: 歴史問題、「謝罪」の定義の差異、漢文脈

4. 日本の中国観Ⅳ—最近在日本出版中国関連書籍考察—（07.8-08.8）

07.12~08.1 中国餃子中毒事件、08.3 チベット動乱、08.5 四川大地震、08.8 北京オリンピック。一ノ瀬達也（2007.11）『旅順と南京—日中五十年戦争の起源』文藝春秋 文春新書 605、楊逸（2008.7）『時が滲（にじ）む朝』文藝春秋等。キーワード: 日中戦争の起源、旅順虐殺事件、芥川賞

5. 日本の中国観Ⅴ—最近在日本出版中国関連書籍考察—（08.9-09.8）

2009.6 天安門事件 20 周年。南條竹則（2009.2）『中華美味紀行』新潮社 新潮新書 301、伊藤雅雄（2009.3）『中国ご一行様からクレームです! 中国人観光客とうまく付き合うためのヒント』三修社等。キーワード: 小吃^{シャオチー}、中国人観光客

6. 日本の中国観Ⅵ—最近在日本出版中国関連書籍考察—（09.9-10.8）

2010.3-10 上海万博。荒川清秀（2009.12）『体験的中国語の学び方—わたしと中国語、中国との関わり』同学社、田中宇（さかい）著（2010.6）『米中逆転—なぜ世界は多極化するのか?』角川書店 角川 one テーマ 21 等。キーワード: 米国の自滅的な覇権崩壊、寺村先生、香坂先生